

二〇二二年一〇月二二日

夕鴟や槌音止まぬ宮普請  
群青の空舞ひ降りて小鳥来る  
鰯雲ペダル足のをとめ仰ぐ  
手に重き日の温もりの熟柿吸ふ  
闘犬の瞳に赤しななかまど

二〇二二年一〇月二二日

朝冷えに母の遺せしカァデガン  
秋空を蹴飛ばしてをる逆上がり  
草紅葉触れつつ会話車椅子  
冷まじや肩より狭き手術台  
ふつふつと湧き出づ日々や鰯雲  
黄金田の真つ只中に我が母校  
やや寒や茶を啜りつつ相無言  
小鳥来る梢の先の九輪塔

二〇二二年一〇月二〇日

落暉いま黄金波の稲田かな  
曾孫抱き夫の墓訪ふ秋日和  
色鳥に返す術なき羽根拾ふ  
甘藷堀りの子らの頭に日の匂ひ  
客寄せと思ふ秋刀魚を焼く煙  
蔦紅葉鎧ひて仁王立つ古木

二〇二二年一〇月一九日

秋潮の満つる舞台に観世能  
古の磴の歪みやそぞろ寒  
村ぢゆうの子らが総出や秋まつり

二〇二二年一〇月一八日

朝寒や散歩に選ぶ日向道  
乗換への駅の木椅子のそぞろ寒  
橋半ば供華の白菊身にぞ入む  
ふたりして聖書輪読する夜長  
懸崖菊万朶の蕾揃ひけり  
秋さぶや古き商家の虫籠窓

二〇二二年一〇月一七日

秋灯下娘の生まれ日のワイン抜く  
尺ほどの野仏埋む野菊かな  
ぎんなんを剥く手も口も忙しげに  
帯締に母の残り香萩日和

二〇二二年一〇月一六日

運動会をどる法被の背に夢と  
津軽発つ木箱の林檎香しき  
山峡に飴す太鼓秋祭  
白壁の蔵に柿映ゆ旧家かな  
秋麗や御目優しき首仏  
新藁で大草鞋編み奉納す  
剥き方も伝承といふ吊し柿  
自然薯の醜男ぶりを選びたり

隆松

みづき

やよい

せいじ

宏虎

満天

あひる

智恵子

はく子

邑

こすもす

千鶴

うつぎ

明日香

やよい

みきお

豊実

凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年一〇月二四日

なつき

宏虎

あひる

凡士

素秀

董雨

満天

満天

素秀

うつぎ

菜々

邑

ぼんこ

明日香

はく子

たか子

なつき

あひる

むべ

凡士

凡士